戦争を知らない世代へ 47 千葉編

飢餓との闘い

—買い出し体験の記録—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊼千葉編

飢餓との闘い

―買い出し体験の記録―

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊼
飢餓との闘い　買い出し体験の記録

昭和53年9月19日　初版第1刷発行

編者©　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　栗生一郎
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101　東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替　東京5—117823　電話03(294)8731(代)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社 星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します　0036—7047—4438
1978 Printed in Japan

発刊の辞

昭和四十九年六月二十三日に、『地道ながら反戦の砦を、全民衆の心の中に築き――』と、訴えながら発刊された反戦出版シリーズも、この千葉編で四十七編目になった。

全シリーズ、全体験のひとつひとつが、〝戦争〟の恐怖と愚かしさを切々と語り、恒久平和を叫んでいる。

たしかに、私達戦後生まれの世代は〝戦争〟を知らないし、その惨状、辛さの実体は、実感として解らない。また、戦争を〝政治的必然性〟として評価したり、観念として、歴史的状況のみを分析し、浅薄な判断を下しかねないであろう。

しかし、『今までに良かった戦争と、悪かった平和は、かつて一度もなかった』との至言を思い起こすたびに、私達戦争を知らない世代は、歴史を繋ぐ一世代としての責任において、戦争とは何か、戦争とはどういうものであるのかを知り、〝戦争〟の普遍的にして的確な定義を残しておかねばならないと思う。

〝良かった戦争はなかった！〟との、この一言の裏に、どれほど多くの民衆の真実の犠牲を必要としたか……。戦争はもう嫌だ！　と叫ぶ原体験者の姿に接するたびに、私達はこう思わざるを得なかった。

私達が戦争を正しく理解するためには、その中を過ごして来た人々の言葉に真摯に耳を傾け、その人々が実感してきた、幾多の〝体験〟そのものをして〝戦争〟の普遍的定義としていく以外に道はない。

私達は、戦争の残酷さと悲惨さを訴えるために原体験の継承と、また人類が未来においてこれ以上無益な殺戮を繰り返さないようにとの祈りを込めて、この千葉編においても、真実に戦争を知る人々の声を収録することにした。

表題が示すとおり、戦争そのものの直接的な告発は他編に譲ることにして、本編ではその時機を強要された庶民の生活にスポットを当て、戦争のもたらした他面的状況を紹介することによって、苛酷な環境の中でどれほど多くの人達が苦労、呻吟していったかを訴えることとした。

ともあれ、無辜の民衆がその犠牲となる愚劣な歴史の反復に終止符を打つために、私達はこの地道な活動を完成させ、二十一世紀へと流れ行く歴史の河の中に、一条の反戦の燈台を打ち建て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

発刊の辞

第一章　飢餓戦線

泣きながら摘んだタンポポ……飯野クニ　11
水蜜桃に悲しい思い出……椎名千代　15
赤ちゃんを死なせてもいいのですか……西山みつ　19
大根の葉……広塚朝吉　24
〝ミルク〟に暮れたあの頃……白田とみえ　27
モンペ姿の青春……服部昭栄　32
粉雪舞う新潟へ……篠田辰雄　37
銃後を守る妻として……川島　節　42
配給所になった私の家……竹内芳江　46

ておきたい。

このささやかな私達の努力が、やがて世界平和への確かな発条になることを堅く信じて――。

昭和五十三年九月八日

創価学会青年部
千葉県青年部長　津田忠昭

垣間見た戦争の断面……榊　滝太郎　50
母の形見のいも畑……伊奈栄子　55
私の終戦前後……木内光子　60
十七歳の辛い日々……矢島玉子　65
せつないタケノコ生活……岡田為子　70
「平和ってなんていいんだろう」……福田きぬ　73
〝悪魔〟のような日々……長島とく　77
横暴な取り締まりを糾弾して……小河性心　81
父の死にも無力な私……藤井ヨシ　86
当時をふり返って……布施信正　89
狂気の時代を生きて……佐藤三佐子　94
空襲が続くなかで……三上玉枝　98

第二章　リュックは語る

「一斉はここだけじゃないぞ」……山本清司　105
検査の目をくらまして米を運ぶ……近藤幸司郎　109

最後の御馳走はくず湯だった……佐藤辰五郎 114
たけのこ生活……植村周子 118
留置場で明かした一夜……山中貞衛 123
〝食〟のために消えていった品物……池田美代子 127
口惜し涙の取り締まり……佐藤三千子 131
たった一度の苦い体験……渡辺ナカ 137
涙ですすった雑炊……桜井キヨ 141
買い出し列車は欲望列車……出口しん 145
雑貨屋になった特攻隊……二宮通明 149
芋に化けた嫁入り衣装……捧すみ子 153
米を求めて……林信一 157
あの苦しみの日々……伊藤くに子 161
買い出しの途中で機銃掃射に……工藤愛子 166
我孫子の鉄橋……坂本勇 171
馬鹿げた闘いと庶民の知恵……谷口栄次 175
涙に濡れたリュックサック……吉沢千代子 180

農家から見た買い出し(1)……飯田誠吉 185
農家から見た買い出し(2)……小名木由三 190

第三章　おさなき戦い

姉と二人で逃げた畔道……生実得也 195
十二歳の買い出し隊員……西村弘子 201
非国民に思った買い出し……市原美代子 206
小さな買い出し部隊……田中怜子 209
母と二人で……小林義孝 214
いつも空腹だった……野村春仲 218
生き抜くために……守屋春彦 223
習志野原の白い雲……後藤　清 228
一徹な父すらも……和田京子 231
モミガラ混じりの米俵……上原六雄 236
悲しき買い出しの思い出……草野都久子 240
あとがき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　飢餓戦線

泣きながら摘んだタンポポ

飯野クニ（当時25歳）

これからの子供たちには、あのような思いは決してさせたくない……。それ程、戦争は残酷にも、人間の生命を、財産を、そして食糧を私達から奪っていきました。食べるものも満足にない生活状態の中で、〝本当によくやってきたものだなあ〟と今でも思います。

昭和十八年一月に長女が誕生――。この子を何としても育てなければ……と。しかし、当時の食べ物といえば、配給の、それもわずかな食糧だけです。そこで私は、食べられるものなら何でもいいから分けてほしい、と言いながら隣近所を回って歩きました。母乳の出を良くするためにと多くの水を飲んだことも覚えています。そんな生活が一年ぐらい続いた後、二人目の子供を身ごもりました。丁度その頃、一家の大黒柱である主人が、市川の国府台陸軍病院へ教育実習生として召集されてしまいました。私の家は当時、堀切の駅のすぐ近くでクリーニング業を営んでおりましたが、主人が召集されてからは家業も続けられず、ただもう一日も早く主人が帰ってくる事を願っているばかりでした。いつ終わるとも知れない戦争の中で、明日への希望もないまま、私

はお腹の子供を気づかいつつ、長女を抱きかかえるようにして、何度となく主人に面会に行きました。その頃、私の家の近所に陸軍の中隊長さんが住んでおりました。当時、階級の上の人は家から通勤しておりましたので、その方に頼んで、一日も早く主人を帰してくれるようにしてもらおうと、真剣に考えていたものです。

幸いにして何とか幼い子供にはお腹のすく思いはさせませんでしたが、肝心の私の方が配給されるものだけでは足らず、暗くなると物がハッキリ見えない「夜盲症」になったり、疲労と空腹のために、少し歩くと足がふらついたりするという状態でした。その頃食べていた物といえば、玄米の中にとうもろこしをすりつぶして混ぜたものや、さつまいも、じゃがいも、かぼちゃ、また畑の肥料にするしめかす等、ともかく、おいしいだとか、栄養になるとかは考えることもなく、ただもうお腹がきつくなればいいという思いだけで食べていたのです。

とにかく、配給の食糧だけではとても足りず、一週間に一度位の割合で千葉の方へ買い出しに出かけました。家が堀切駅の近くでしたので、京成線を利用して、千葉の志津という所へよく行ったものです。二歳に満たない子供を背中におぶい、半ば栄養失調の重い身体でしたけれども、買い出し部隊の皆さんの協力と激励とで何とか山道も歩いて行きました。やっと辿りついた農家でも人によっては、快く受け入れてくれる人もいれば、つっけんどんに追い帰される事もありました。その当時は、お金よりも物が大切な時代でしたので、親からもらった大切な着物、主人の

オーバーや子供の着物までも、行くたびに持ち出し食糧と交換してもらいました。交換してもらったさつまいもとじゃがいもの袋を子供と一緒に背負い、両手には野菜を、そして少しばかりのお米はお腹に巻きつけて、警官に見つからないようにするため、橋の下に隠れたり、畑の隅で暗くなるのを待ち、駅までの道のりを、何度も休みながら歩いたものです。しかし、そんな思いまでして持って来た荷物も、途中に潜んでいた警官に取り上げられてしまう事も何度かありました。そんな日は、近くの河原でタンポポ等の雑草を集め、それを煮て食べるだけでした。その時のみじめな、悔しい、情けない気持は言葉にあらわしようがありません。何でこのような目に遭わなければいけないのかと涙したものです。

こうした必死の一日一日を続けて半年程たった頃、主人が国府台からようやく帰って来ました。それからは主人が買い出しによく出かけていきました。自転車に乗って松戸の方から、背中と荷台に食糧をいっぱい乗せ元気よく帰って来る姿を見つけた日は、とても嬉しかった事を覚えています。でもやはり、何度か荷物を取り上げられた日もあり、そんな時は主人も随分悔しがったものです。

主人が帰って来てすぐの頃から、米軍機による本土空襲が激しさを増し、東京中は至る所火の海となりました。忘れもしません、三月九日です。東京大空襲により、白ひげ橋の近くに住んでいた私の姉と、当時十九歳になった妹と、姉の子供の六歳の男の子と四歳の子が一夜にして死ん

でしまいました。

そして、竹の子の皮を一枚一枚はがすような生活が終戦後も数年間続きました。

私以上に大変な生活をした人も沢山いらっしゃる事と思いますが、〝戦争だけはもう御免だ、今の幸せを誰にも奪われたくない〟そう思い続けている私です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com